

Q

## Question

京タケノコは、やわらかくて風味があることはよく知られています。こうしたタケノコをつくるのには大変な手間がかけられていることも知りました。その中での最高級品シロコとは一体どんなものなのでしょうか？

A

竹の学校の竹林は2002年から整備しはじめて、8年間の努力を重ねて一流の京タケノコが採れるようになりました。その上、2010年には、シロコも10本ほど採れました。一般には大枝塚原(京都市西京区)ではシロコが出やすく、それは赤粘土の中でも白っぽい保水力のあるものを土入れするからであると言われます。竹の学校の土壌は基本的には赤粘土です。ただし地下1メートルのところに白粘土層があり、これを掘り出して一部に土入れ(客土)しはじめました。

しかし、この作業が十分ではないのにシロコが発生したのです。

その理由もわかりませんがいろいろ想像しています。

シロコは劣性遺伝(この言葉は遺伝学上のもので劣っているという意味はありません)によるものだとされます。良質のタケノコは土壌の水もちがよいところのできるようです。竹林が南斜面であれば早期に発筍する特徴がありますが、北斜面では土壌の水もちがよいので、良質のタケノコができる可能性が大きくなります。

竹の学校の竹林は北斜面です。そんな条件の中で、劣性遺伝があったのだろうかと考えてみました。



(竹の学校の竹林のシロコ)

Answer

Q

## Question

タケの一生はどのようになっていますか？

A

タケノコは成長してタケになりますが、最初の1年はタケノコを生みません。2年目から生みはじめ、4年目で最高に生み、5年目には衰え、6年経つとタケノコを生まなくなります。(だからタケノコ畑としては6年生のタケは伐採します。)そして15年ぐらいで枯れていきます。

植物はみどりと水に太陽光をうけて光合成をし、そのエネルギーで生きています。この光合成のとき、大気中の二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を吸収します。地球温暖化の原因の一つにCO<sub>2</sub>が過剰になっているといわれ、植物の光合成による、吸収が期待されています。けれども老木では吸収力は弱いので森林の場合は植樹して、いつも若い状態に保たなければ役にたちません。その点から考えると、タケノコ畑としての竹林はタケノコを生むことができる若いものだけです。なおかつタケノコは自然にでできますから植林の必要もありません。CO<sub>2</sub>吸収力の最強軍団と言えるでしょう。

今、放置竹林は厄介もの扱いにされています。タケノコ畑のやり方を参考にして、うまい整備方法をあみだせれば、経済的な温暖化防止策になるでしょう。

Answer

Q

## Question

タケには面白い未来がありますね。しかし研究はまだこれから…。

A

森林面積のうちで竹林が占めるのは1%程度です。そのせいか一般の関心も高くありませんし、タケ学者の数も多くありません。今後の研究に待つところが多いのです

2010年5月、NHKTVのBSハイビジョン「アインシュタインの眼」でタケの生態を扱いました。その企画段階のとき、「竹林に居ると気分がよくなり、癒し効果があるのはなぜか?」という取材を受けました。「まだ医学的・心理学的データがない状態なので、今後の問題だ」と答えました。全国どこにも資料がないのか、番組では竹林の癒し効果について触れられませんでした。

竹の学校では毎年、秋に竹林コンサートを催しています。この音響効果がとてもよいのです。けれどもその理由はわかりませんでした。そのことについて、「アインシュタインの眼」では面白い実験を見せてくれました。樹林と竹林とで音の伝播や反響を比較実験したのです。その違いは顕著であり、竹林での音楽が美しく聴けるわけが理解できました。

そんなわけで、竹林、タケ、タケノコには不思議(ワンダー)がたくさんあります。

Answer